

## 巻頭言

# 保育における進歩とは

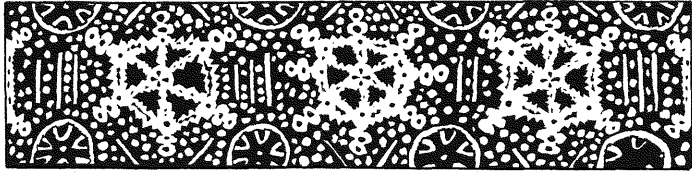
金田 利子

かの土地に見合いし住まいまもり来し アフガンの知恵胸突くは何  
人類の暮らしの原点ここに見ゆ 内から文化壊す日本か

右の二首は、最近「アフガニスタンの住まいと文化遺産」と題する講演（西川幸治氏）を聴く機会があったが、その際の感想を筆者が即興的に詠んだものである。

「進歩」とは何かが問われて久しい。日本もそうであるが、最近のおびただしい自然や文化を破壊して進める開発とそれをよしとする「進歩主義」への警鐘である。

同様の視点が人間の発達においても課題になってきている。右肩上がりの知的発達

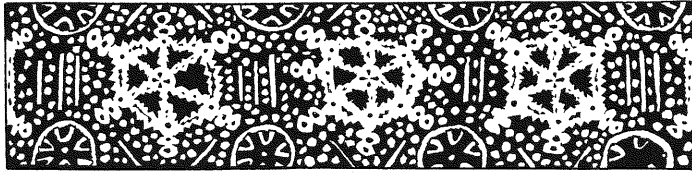


の高次化のみが追い求められることへの「進歩主義的」人間観の問い直しである。しかし、もしあらゆる進歩を否定するならば、たとえば電気も認知の発達も不要になり、極端に言えば原始に帰ることがもつともよいことになる。

保育は、まさしくこうした原点とも言える人間観・歴史観と切り離すことは出来ない。人間発達を専門とする筆者にとつても避けて通ることの出来ない課題である。

ここでは、この課題をグリム童話の一つでイギリスの昔話である『三びきのこぶた』を基に考えてみたい。童話の再話は、国によって、また国の中でも翻訳者によってかなり違ったものになっている。学生たちにどんな物語なのかを問うと原作とはかなり違う話が伝わっていることがわかる。それは、三匹は同時に自立のために家を出て自分の家を作るのだが、怠け者の長兄は最も楽に建てられそうな藁を、次兄は次に楽そうな木を、いつもは兄たちにいじめられているが勤勉で賢い弟は煉瓦を選んだ。結果、兄たちの家はオオカミに吹き飛ばされるが、弟の家は頑丈でオオカミにはびくともしないというもので、その先も誰も傷つかず謝罪で助かることになっている。

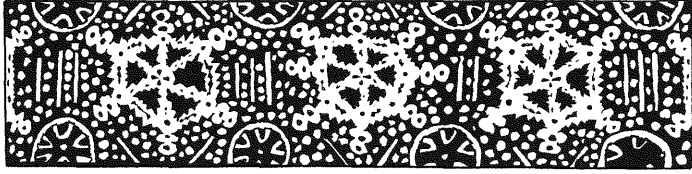
しかし、原作（福音館本は直訳）には、歴史観がはいっており、三匹は決して同時に家を出るようにはなっていないし、それぞれが自分の意志で材料を選んだとはなっておらず、たまたま出会った人の持っていた資料をもらって家を建てたとなっている。そして、はじめの藁と次の木の二軒は吹き飛ばされこぶたは二匹ともはオオカミ



に食べられてしまい、最後の煉瓦の家はオオカミは如何ともしがたく、あの手この手で誘い出すが、こぶたの英知でオオカミが負け最後には逆にオオカミを食べてしまう。

前者の再話への課題意識の欠如に関する批判はすでになされているが、ここでは、先の課題に戻り歴史観の点についてのみ取り上げる。すなわち、決して同時に家を出ておらず、長兄が藁で建てたのも三番目が煉瓦で建てたのも能力や性格の結果ではなく、たまたま出会ったのがそれを持っている人であり、その時代だからだという歴史性が明確に位置付いているという点についてである。

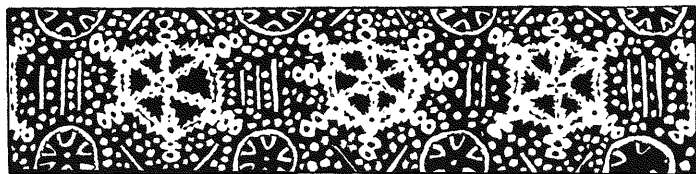
人間の発達を個体発達としてだけみると、大人は子どもより発達した存在（≡先輩）であるが、系統発達から将来を見通すとき、子ども、それも出来るだけ後から生まれ幼いものほどより大きく発達する可能性を、社会が人間中心に進んでいくならば、持っているという意味で、アナロジックに言えば系統発達上の「先輩」になり得る。この、パラドックスすなわち後から生まれたものほど、発展していける可能性について説明するために、筆者は、『三びきのこぶた』の歴史的描述を活用してきた。複製にしても『ガリ版（藁）→青焼き（木）→ゼロックス（煉瓦）』と、通信にしても「郵便のみ→ファックスも→Eメールも」と「発展」し、今日においても、後から生まれたものの方が活用を間違えなければより人間的な資質を発達させる条件が拡大してきている。中年と若者を今の時点で比べれば、中年の方が先輩であるが、中年が



二十歳の時点を思い起こせば今の青年の方が「先輩」だと語るときにである。

もちろん「進歩」には、その陰にもっと大きな落とし穴がある（オオカミが潜んでいる）ことを同時にとり入れる。すなわち、プロセスを見えにくくしており、そのことは、一旦電気が止まれば機能を麻痺させるし、黄粉と節分の時の炒り豆の関係を知らず安倍川餅を食べるように、原料も製造法も知らずにものを食べているために「味わう」といつてもその内容が貧しくなるというように、人生の内的な豊かさの欠如をもたらす。また、手足を使わず結果が得られるため、成長・発達途上の子どもには保育において遊びの中で右記のような活動を保障しないと発達を阻害することにも繋がります。総じて言うと、三匹目のこぶたの時代においては煉瓦があつた、が同時に、英知を働かせオオカミと闘ったからこそ生き残ることが出来た。進歩も否定はできないが、同時に常に新たなオオカミの出現と闘っていく必要があるということになる。

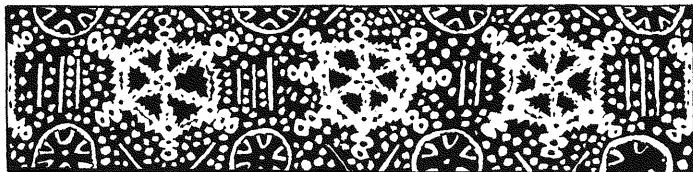
一方、辻真一氏は『スロー・イズ・ビューティフル』（平凡社）の中で、同じ『三匹の子豚』に触れ、「三匹のそれぞれが建てる家、藁の家、木の家、石の家（石は原作ではブリック煉瓦…筆者注）。結局頑丈で安全な石の家を造った豚が利口だという他愛のない話だが、ここに僕はほとんど悪意にも似た西洋中心思想の迷惑を感じてしまう。……二十世紀後半の開発イデオロギーにうつつつけの寓話だ。……今でも幼稚園で幼い子どもたちに『三匹の子豚』の劇をやらせている。そしてコンクリートを



崇拜することと、藁と木と紙と土の家に住んだ祖先を愚弄することを教えている」と。そして、『三匹の子豚』から『空とぶ豚』へ。ほくたちはストーリーを思いつきりひっくり返してやらなければならない。長い長い年月の中で大地によって育まれ、文化によって形づくられた「スロー・ホーム」への物語へと」と。(空飛ぶ豚)とはオーストラリア南部の藁で出来ているB&B(朝食付きの宿)のファンキーな名前……辻氏による)。

確かに、先にも「進歩」の問題点について述べたように、藁から木へ、木から煉瓦へと開発していくことを手放してよしとは思えない。しかし、『三びきのこぶた』の思想は、西欧の近代主義を教えようとしているとのみは捉えられない。もし、三匹が同時に家を出てそれぞれの意志で材料を選んだのであれば、辻氏の言うように、「安くて頑丈な家をつくった豚が利口だ」という他愛もない話」ということになる。そして、先に挙げた日本に多く出回っている原作に忠実でない再話で言えば、まさしくこのようなことを教えることになりかねない。原作の主張は、その豚(人間)がどの時代に生まれたかは個人の力ではなく、これだけは歴史的に決められてしまっている、その歴史的条件を、生き抜く力に変えていくところに知恵が必要なのではないかというものであり、奥深い話でこそあれ、決して「他愛のない話」というものではない。

しかし、童話一つにしても、無意識的に扱うことにより単純に進歩主義を教え込ん



でいる結果になったり、歴史的な視点に目覚める契機になったりと、大きな哲学的視点を内包していることに、保育においても、敏感でなければならない。

必要なことは、歴史的な進歩と、もしかしたら陥るかも知れない進歩主義の関係を考えて見ることはないか。大切なのは、進歩と進歩主義の区別ではないか。進歩は全面否定はできない。問題なのは進歩こそ第一と見る進歩主義ではないだろうか。

辻氏の、そこへひっくり返したい「空とぶ豚」の「藁の家」は、「藁を圧縮してつくった直方体のブロックを積み上げ、その表面を土で固めてできたもの」だということ。それは材料が藁なのであるが、エコロジー建築家たちの進歩した技術がもたらしたものであり、「進歩主義」を批判した、しかしまさに「進歩した藁の家」だと言える。そしてそれこそが大切なのだと思う。長い人類の文化の歴史を尊敬し、高齢者の知恵から、目の前のものの作られるプロセスを知り、古いものの中に新しいものを新しいものの中に古いものを取り入れ、民主主義の進歩と科学の進歩が相伴って、真の人間の文化を進歩させていく方向を目指していくことが求められる。それはまさに、後から生まれたものが「先輩」になり得る進歩の道に繋がるものと考ええる。

人類の真の進歩を考えると、乳幼児時代に手足、頭や体全体を使って先人の足跡を遊びの中に取り入れることがどんなに大切かが見えてくるのではないかと思う。

(静岡大学)